明石の史跡（２５）明石飛脚

数ある上方落語のなかに、「明石飛脚（あかしびきゃく）」と題する咄がある（米朝落語全集３．１５３－１６０頁）。ご存知の方は、かなりの落語通かと推察する。

　ある日、ある時、大坂の町人が、晩までに明石へ手紙を届けたいと思って、飛脚宿を尋ねたところ、飛脚が全員出はらっていた。仕方なく、近くの足自慢の男に、依頼をする。この男、明石に行ったことがなく、その距離は１５里であると教えられる。徳川幕府は、主要街道筋に１里塚を設置（３６町＝１里＝４キロ弱）。現在の大阪―明石間は約６０キロ弱ほどであり、咄に出てくる１５里というのも、あながちに荒唐無稽な数字ではない。

　配達便を委託された足自慢の男は、身支度（手甲脚袢草鞋ばき）をととのえて西へ向かって出発。途中、西宮・三ノ宮・兵庫・須磨・舞子で、大坂・明石間の距離を尋ね、つねに１５里という答が返ってくるので、がっかりする。それでもようやく夕景直前に、人丸社にたどり着き、境内の茶店の床几に横になり、熟睡。閉店準備の主人に起され、あらためてここはどこですかと問う。明石の人丸さんと聞き、やっと明石に着いたのか、「走るより寝てるほうが早かった」というセリフでオチになる（口演時間は１０分という短編）。

　足自慢の男でも日中を要するとは、本当にまじめに走ったのかと疑いたくなる。安政２年（１８５５）の２月中旬のある朝８時頃、明石港に降り立った福沢諭吉（２２歳）は、徒歩１４時間を要して、兄三之助の勤務先（大坂中島の中津藩蔵屋敷）に到着している（会田倉吉著『福沢諭吉』５５頁）。諭吉とくらべても、「明石飛脚」に登場する所要時間は、笑いのネタになるほど、遅いものではない。ただ大坂から夕景までに町中に入れる明石という場所は、上方文化の西端に位置するという地理的条件を、忘れてはならないだろう。

日本歴史学会会員 茨木 一成